春陽會ニュース

所感

水谷清

戦災、疎開と部落ちをして四年になる。人並に苦労もした。其の間に得た收穫の一つは、東京人の離れ難れが、吾々の身上では当然つきまとう虚栄ーシャーナリズムと言むーを加算しての生活を跡りとしている悪かさを識ったことである。

我が身の程を知った禅だ。

近々私も東京住いの仲間入りをするが、この悪は繰返さないつもりだ。東京とかうもの美みは当然現代文化と直結出来るが、現代に住んで現代人でないのはおかしい。そこ迄の底音をあつかう意味ではない。

歌壇をどとかうものは假空のもので、有って無いものであてにならない。己が自身に歌壇を持ち、環境を育くむことがあてにならることで意義のあることだ。

東京であろうと、田舎であろう要は何どこに住むなどは問題外で、結局は己が芸術を如何に練り磨き生長を心掛けるかにかかっている。

田舎に居てファンドシがゆるむのはみっともないが、東京組も反省しなければならない。

ついこの間ブルューゲルの複製展を見て、北欧を歩かなかった私は大部分の彼の仕事の輪郭に二、三記憶にある彼の作品を細部にちくはめてみて、興味つきないものがあった。全くブリューゲルその人の全身が北欧に満ちて歌劇のはを米ず廻っている感じがした。この人の生涯はそんな意味で真に良いサンプルだと思った。

たゞ吾々は断間なく生長しなければならない。芸術に志すものにとっては、その生涯に終止符を打つ迄は、老木のなお年輪を増す如くありたいものだ。しかし芸の生長は年輪のようにはいかない。波がある。一年で優に十年の生長もあろうが、十年一日、後退さえもある。それだけにたゆまぬ練磨がたつた一つの資本である。

たとえばボンナール八十年の生涯は貴い生長の生涯である。しかも常人も生き得る道・を示してくれている（前号ノ木村氏年頭言下半参照）ルノアール晩年のあの絵が、中風の動かぬ手にブラシを くくりつけて描いたものとは思えない。まこと、北風に吹きさらされて、めげない巨木の様に立派だ。

若木の発芽月のたくましさもさることながら、老木にして頑、年輪を増すたしかさは、おそろしい。春陽の老、中老、このおそろしい仲間を少しとしない。慶賀の到りだ。

会員によれば、今年あたりから若手に事務が移って行く過程がみえている。中ぶら多幸の吾々もやがては、この事務陣を離れることを許されるだろう。

先輩がそうであったように、後輩を見方からは、後退の形をとるが、実は此の辺から吾々も練習生時代を過ぎてはたして絵師の仲間入りが出来るかどうかの制作期の土俵に……これより現役になる寸法でいる。

（24.1.26）

アランの言葉

○絵画は色彩ある形による感情の直接的表現である。

○絵はすべての観念を抹消してすべて感覚に還元すべきである。

○描かれた形は色彩によってのみ表現的である。

○ものを理解するためには、今迄長く消えぬ易い外見から、絵画の力を感ずるためには、この色彩ある神秘の力を感ずるためには、この色彩ある神秘の力を感ずるためには、この色彩ある神秘